



堀 明日翔 (ほり あすか) 上柚木小 6年生

作品名：無駄にしない「考」動

図 書：世界から猫が消えたなら

僕は、「世界から猫が消えたなら」という本を読んだ。この本は、二〇一三年に本屋大賞の最終候補にノミネートされ、又、二〇一六年に映画もされ、興味を持って選んだ。

この本は、三十歳で映画鑑賞が趣味の郵便配達員が主人公だ。猫のキャベツと暮らしている。主人公はある日、脳腫瘍で余命僅かと告げられる。絶望する主人公の前に、自分と同じ姿をした悪魔が現れた。悪魔は、「この世界から一つ物を消す代わりに、あなたは一日の命を得られる」と持ちかけられ、主人公は生きるために物を消すことを決める。そんな主人公の七日間の物語である

僕はこの本を読んで、

「僕は母さんにかける一本の電話よりも、目の前の着信履歴にかけ直すことで目いっぱいになっていた。本当に大切なことを後回しにして、目の前にあるさほど重要ではないことを優先して日々生きてきたのだ。」

というところが心に残っている。

これは、電話・映画に次いで時計を消され、三日の命を得た主人公が、悪魔のサービスで言葉を喋るようになった猫のキャベツと散歩に行った時のことだ。

主人公は、ものすごくキャベツをかわいがっていた母を数年前に亡くした。しかし、キャベツはそんな母のことを全く覚えていないという。自分も、死んだらキャベツに忘れられるかもしれない、と思った時の言葉だ。

僕は、この部分を読んで、共感したと同時に、心を揺さぶられた。なぜなら、僕も、何が重要かあまり考えず、ただ闇雲に行動することがあったからである。夏休み中にも、夏休みの宿題を終えてないのに、別の緊急性の無い勉強をするのに時間を費やしてしまった。この読書感想文にも、十分に時間的な余裕を持っていない。又、委員会活動と長縄大会の時期が重なった時も、委員会の締切が近いという理由で、委員会と長縄大会で、十分にバランスが取れなかった。その影響で、長縄大会に十分に時間が取れなかった。

この様なこともあり、僕はこの文章をととても身近に感じ、胸に刺さった。又、この文の前には

「僕が何気なく過ごしてきた時間が、とてつもなく大切なものに思えてくる。僕はあと何回キャベツと一緒に朝を迎えることができるのだろうか。残りの人生、大好きなあの曲を、あと何回聴くことができるのだろうか。あと何回コーヒーが飲めるのか。ごはんは何回、おはよう何回、くしゃみ何回、笑うのはあと何回だ？」

という一節がある。僕は、この言葉と先ほどの言葉を読んだ時、時間は無限ではないと感じた。主人公は、余命僅か、と宣告されて、やりたいことなどの後悔が多くあった。しかし、何が重要か考えずに行動してしまうと、資源である時間を無駄にしてしまう。そんな事を僕は思った。

僕は、この本から時間は決して無限ではなく、目先のことに囚われて行動するのは、その時間を無駄に消費し、本当に大切なことができなくなるということを学んだ。時間が無限ではないことは、死と向き合う主人公からも伝わった。時間は無限でないことは意識するのは死を意識することになり、難しいし悲しいが、時間を無駄にしないという意識を持って、一つ一つ何が大切で何を行うことにより大きい意味や価値があるのか、しっかり考えて「考」動したい。